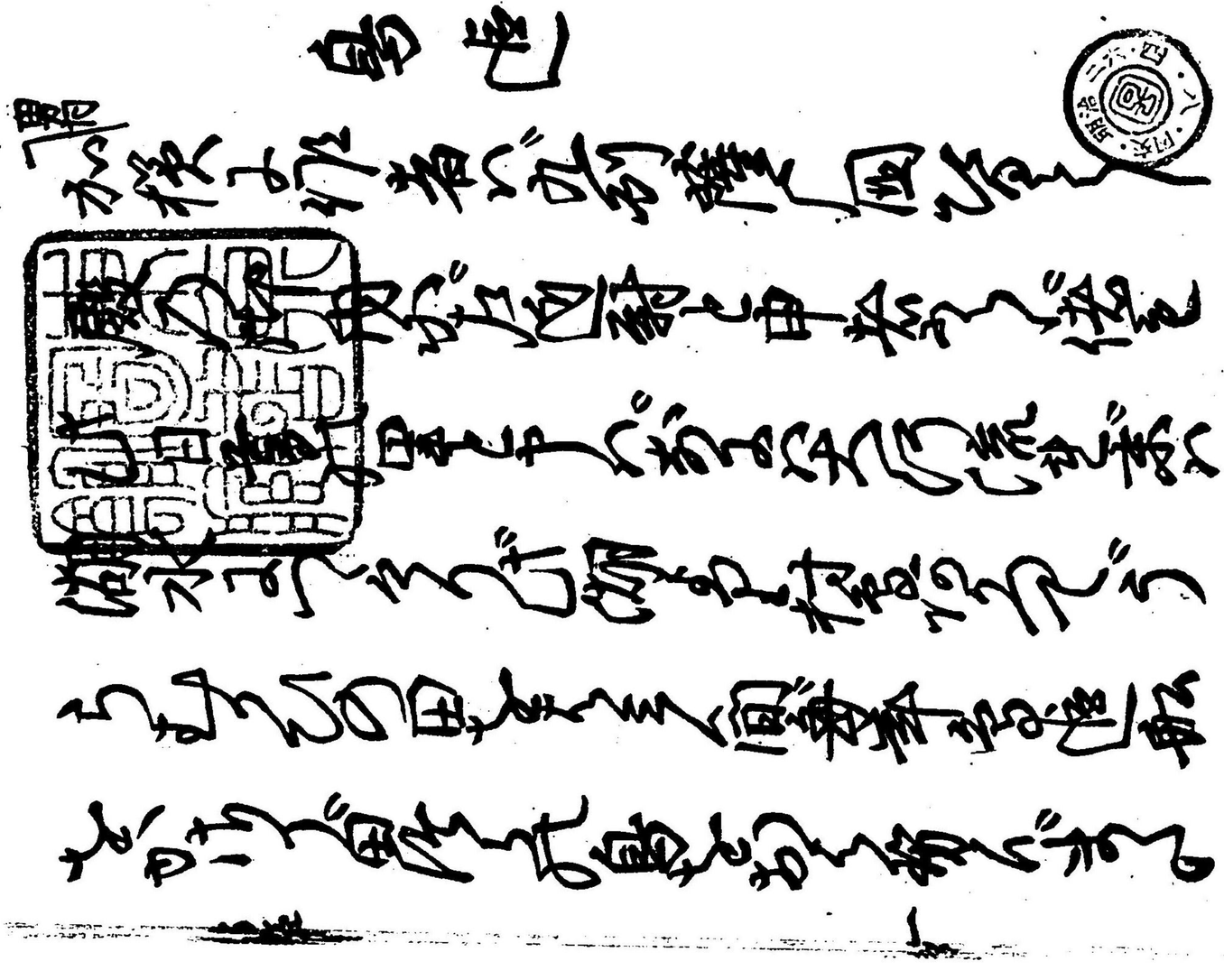
特42
456

訂正觀世流謠別能二十八番

易返船

22



頼もるに日ごろ御所の事ども
里御在京にてとゝ留守りかの
侍方とゞ花ゝはどゝ花さくさ人出
侍ばくばまりうゝ島花ゝきゝ出去
もゝくゝ間花ゝ殿申ゝ侍ゝ
ゝ花ゝ殿ゝ侍ゝ申ゝ侍ゝ家内
ゝ花ゝ殿ゝ射ゝ参ゝ

男 侍ゝ花ゝ殿ゝ花ゝ
秋ゝ花ゝ殿ゝ向ゝ殿ゝ参ゝ
女 いゝて花ゝ殿ゝ参ゝ
男 ゝ唯ゝ今ゝ参ゝ事ゝ出ゝ侍ゝ
ゝ殿ゝ花ゝ殿ゝ舟ゝ殿ゝ島
おゝ参ゝ花ゝ殿ゝ殿ゝ
出ゝ侍ゝ殿ゝ侍ゝ

うだ抜の事申さむ為よしをして
ひ行て花ゐよ田つられ名所知を
やら花見いとき知られをだを
射る為よ名主ゐくいなきぐるう
鳥ゐへ行く申ものかうた図射狩
情なき去れ男行たを射へ
情なき者と行くぶれ心もつて

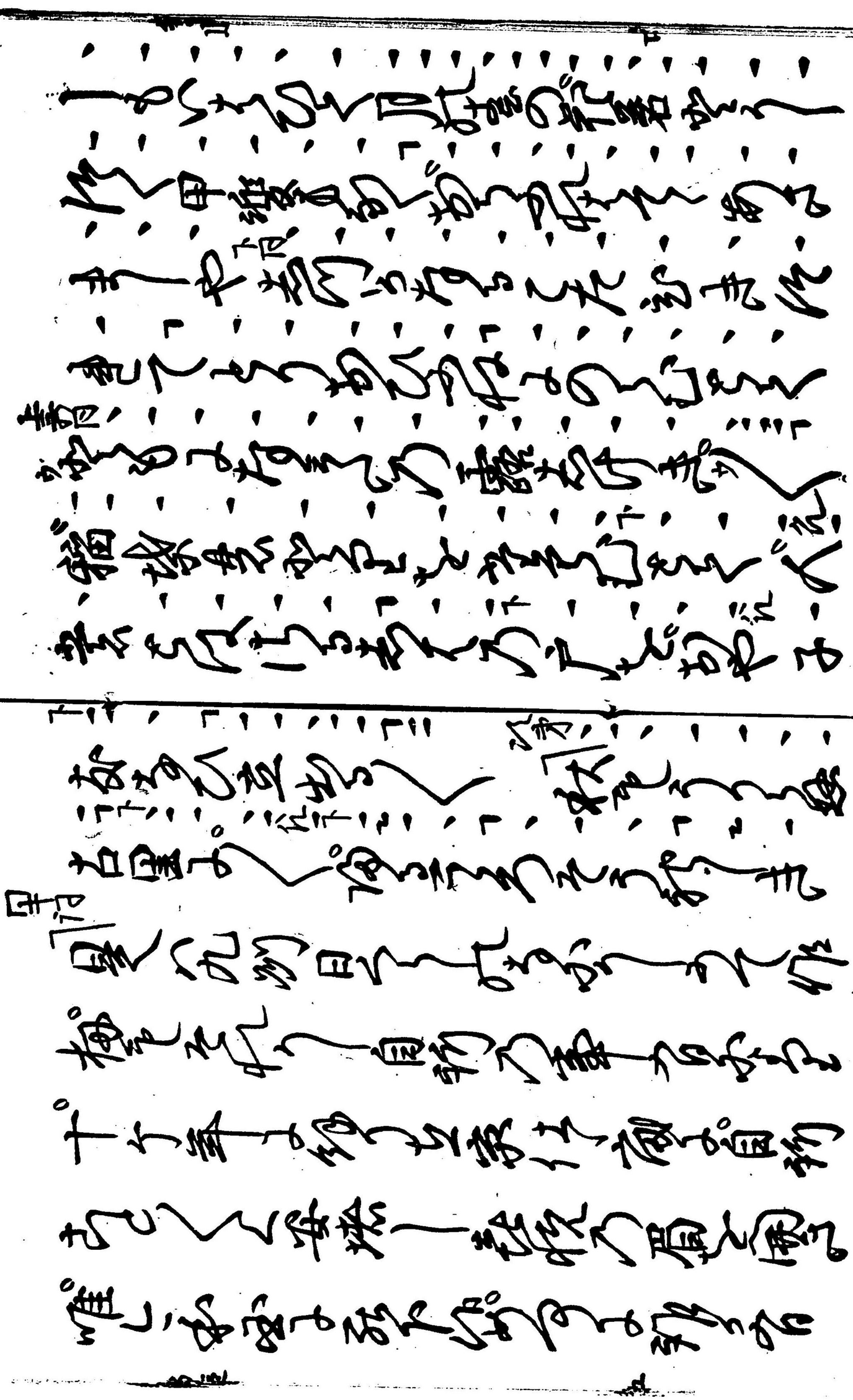
ゆーを作へべ乃ち為さるく申
名五十日百ゐ並一年半年をそ
法留守とやをどとて不十ケ日より
里抜持ーやをる危図射る情なき去
ゐるぐ五箱を家ゐ去名ゐ出られ
ーゐて行よ花ある殿ゐ去ゐる
法追ゐくへべ屋をあらく行方へを

出せ侍く　シテ 突くやらとうる程ゆうら
花すみかるゝうけるけれはへハぶ別
つゝめく鳥をおいてへ　男 それゆう
男をもらゆるゆゑへ花すら段の所
事ハ侍ときなすきちるゆゑし出度くへハ
ぐるしからへ傳るよるゆゑへぶ籠の
出身かゝく出をおやかき来て御らんれ

それしろをと這まそなうしまそる為よ
侍とる　シテ 女を右左の二人ハ心許なく候
へハ二人ともに立出鳥をれいへし
男 それまでも角も御あうひかくら
へいさらば明日舟をとうらして御や
出うもとあれみゆ　シテ 謡 うとうやすかた
ほとし果報ある身の袂をもからしけり

此世仏く　〔シテ〕実くやうとう夢ゆうゝ
花みなうるはしけれどもなくはへハ月
つうもうく島をおひへ　〔男〕それゆう
思ひもよらぬ事かな　へ花みなの所
事ハ伴ときもすきちるのかん御座へハ
ぐうし　かうちるものかくだ藤の
ちう事かく此者物をはなす徳もんれ

それゆうにも遁をそなれまいる為よ
俊くわ　〔シテ〕良寛一人ハ心許なくも
へハ二人ともに立出島をはなれへし
〔男〕それはとも角も御はからひなさるへし
へーさらば明日舟をとうめて御戸
ちうもそれかう　〔シテ上〕ぶんや花若が
ほとく果報なき身の哀れをもあらし下げ



（ワキ）あれはよいうぐいすえ

（シテ）なるほどうぐいすえ

（ワキ）日本（シテ）の音に聞えんへ行すゑてのそ

（ワキ）寄とく変りかへ（シテ）長くいかに（ワキ）聞

（シテ）とあり九州みてへば鳥追舟

（シテ）弘さとつの見えまるくかへ此のねを

（サシ）侍くれそもとは（男）あるそうや

（シテ）いかに

（シテ）昨日云早商いたのまりいまは

（シテ）そうく花よ学のも鳥をあるうや

（女子二人ヤル）我らは心ぞ鳥の下やとうの鳥の

（男）教しまかうもとそうくぶを捨

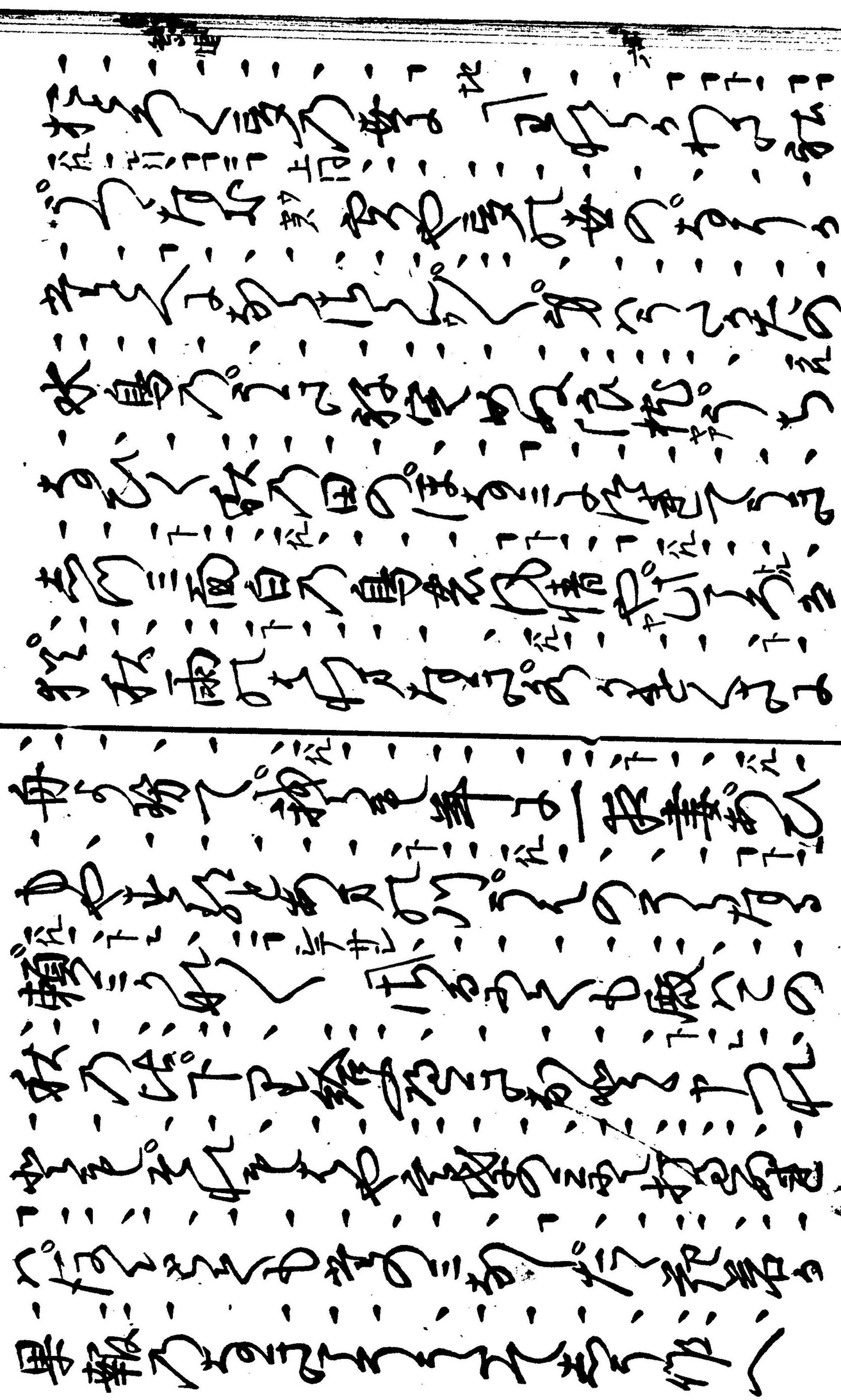
（二人）舟よ鵜飼をうう（シテ）あひ水田り

（シテ）庵りを作と

（三人上）（シテ）よろ小舟よそこと

（地）うまを（シテ）ひとつ（二人）漢の母の唐塩よ

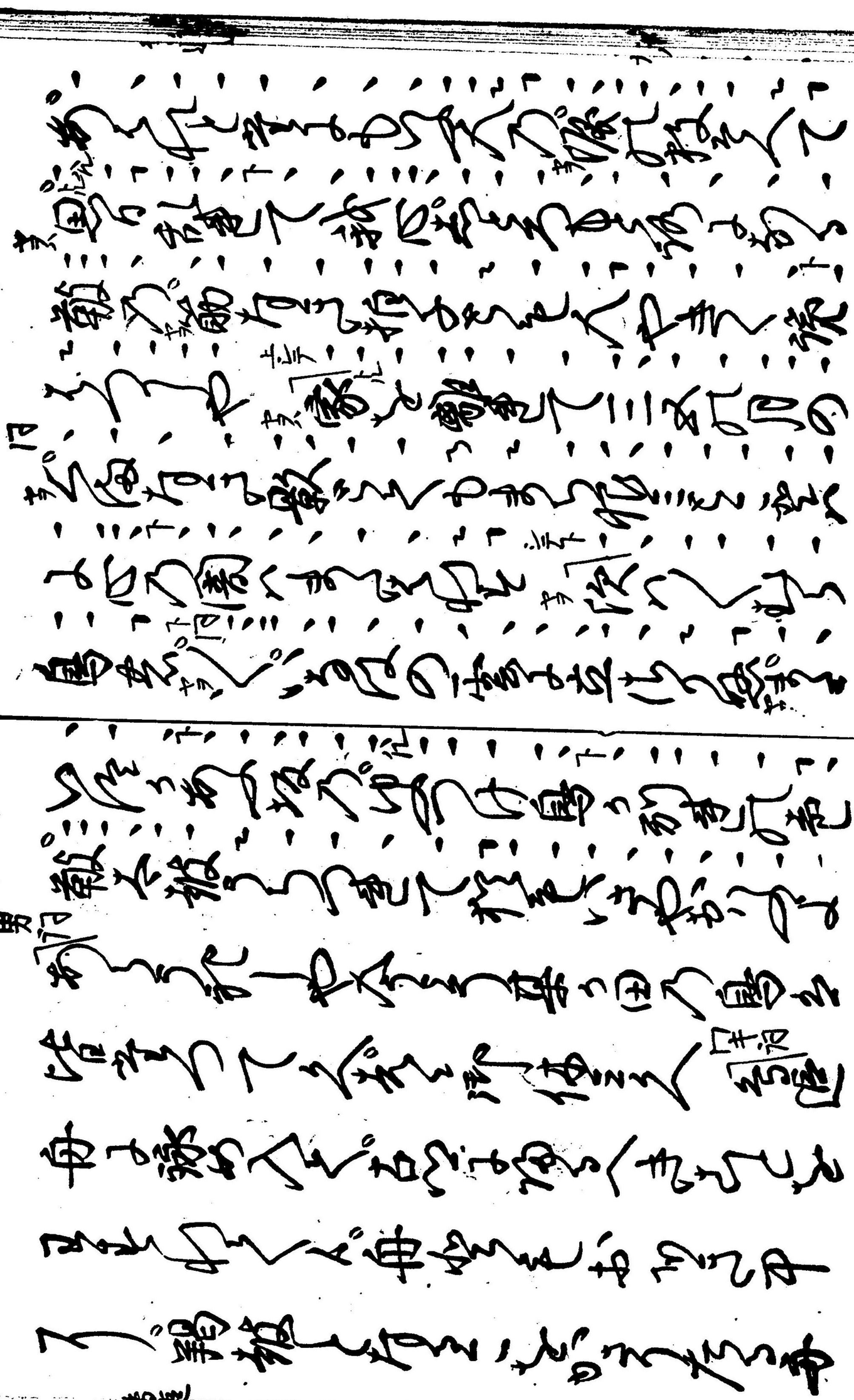
（シテ）うこ市門市やぢくぶん（シテ）鳥を



（子上）「げにや常花にあらましにあかしくらす父
とよ成のおもひの外成事を信じ
なからへ在京し候をも姫を射
情ある者なれバひそかにかくまひ
母御よりひとりき申事よきにはから
しあられ女はよしなうこそ御ゆるし候へ
（トレテ）「かくてもひ新なかれぬとひとも父
もや

あろなよそふすらいかくあろまじき
事よかしあらじ（下同）「よし遊かくかくかるうき
めぐ水鳥のゆかれくそそめらへ
き（男）「是ハ狩何をか御欲そなか
けくのあられ我庭よ帰りても歎きの
久方へ仰の田の鳥ハ皆立さん
ろ姫追射ろ田の鳥ハまつのさつ候

げに為ちひ申てひそ　子上ゑん　出てやな
家人よ　さよもあそらきへぶ　去そて
はちまちら露乃　たくて乃小田も
うとちいよぶつく　秋乃山ちるを
おのうち舟こきつきて　思ひくれ
ちやしも　あれくみやや　ようう乃
舟うも　上月　うり　船ぐ　ぶよちるこれ村
とめあ　ぶ　を　たくそへ　梅ぶつを　春
船ちうくと　風乃うつ屋ゆ　ちのこ　去
花者よう　ぶ　を　あへ屋く　水鳥
上　ぶて　ぶて　き時　へうそむれ
ぶ　乃　衣　ちうち　ぶよもみちや
ちくぶ　まとうめへ　ようるや　衣さむ乃　裏
ちつとうや　恨　ハ日　よ　埴きちもく



面白ふ作。浜舟を迎つ方へ入りもと
あいにあわせつ方をかさくる
舟を迎うをよ　男　あらうきやぶ
つうつをいて。だ迎射う舟あれよきよ
なくいをもるあるそ思ふをよう。ぶ
様入つくつうときふんぶ天時ねかるれ
者うお　口半　あつう舟よきをとうう

口半　見ハ甲く不審也とて漕うへる
島迎舟。迎つ方て能くみきハ
紀百ら厨のて。ふうう　口半　荒めつ
しや。迎射ぶれるふなんちうよみて
宵う　口半　いつや見ハ日ら厨なよう
口半　ふくつなきなるふ舟う舟う　口半　ふんん舟
御かしは入作　口半　それハ行とく時

きさもとにて　又ハ上方にて　又ハ在京と
そ申ぶ事も作り頼ぶ事ハ迚
射世ぶの田乃山ぶ者とおへぶ作く
ハ親ぶ者ぶ者ぶ。我屋ぶ屋ぶ者ぶ
まぶぶ者ぶ者ぶ塩ぶ作ぶ
捨舟ぶ鶏報ぶ者ぶ作ぶ
干乃浪ぶ者ぶ者ぶ作

半紙

武道乃乃事ぶ取ぶ
胎内ぶ弱ぶ者ぶ者ぶ
報乃乃者ぶ者ぶ者ぶ
嶽ぶ者ぶ者ぶ者ぶ
唯ぶ者ぶ者ぶ者ぶ
ぶ者ぶ者ぶ者ぶ
今ぶ迚射ぶ者ぶ

そこなる人なり作へいに危急射ざの
きいつくきんなる去ぬるをもちをあれ
とよ付をくよへざそ姿も育つんづ
作人国より下るあらへがつ流ある恩賞
をもしるらく都みて方場乃甲斐も
なくぎつる主もあつ上きてゞ下人よ
作つなるる渇くく行げくあをへい

シテ上ニ
めとの答もけつをゝ唯
下ニ
久くよ捨をるの光るか父乃答
ハ下ニ
そとよあやまつく仙家よ入てず白
ニ
宮立とりへ先ず石銀ず帰つくを
中ニ
ゆうよ七世の孫よあつあとうう帰り
ニ
てゆへとよ兄ナ約年月日あつ上く
ニ
てぎゝをうくるわをゝ作へやへ
ト三ク

上月こそ
不絶なれ　只ひとつくさぶ狩の花を
我ゆゑ　花の盛を　折る人の
免し給へ　ひとりぬるとなげく侍
お迷ひ　ぬるとやくゆるを
花の枝　折そなほ　彼へぐ家を　ぬるつきを
惜ぶ　不思議　陰ぬ　五書たる　弓
取　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

右之本者觀世太夫織部以章句
眞本令版行畢
天保十一庚子歲孟春改正再板
皇都三条通御幸町西江入町
旧
山本長兵衛
定價三錢五厘
明治廿六年二月十七日印刷
明治廿六年二月同日訂正出版
明治廿六年三月廿九日別製本御届
東京市麹町區飯田町四丁目壹番地
宮内省御用達
訂正者　觀世清廉
京都市上京區三条通御幸町西江入
發行者
兼印刷者　槍常之助

板權所有